

【意識啓発・行動変容専門部会】会議概要

会 議 名	令和7年度第1回意識啓発・行動変容専門部会				
事 務 局	環境政策課長(ごみ減量推進課長兼務)・吉尾 文彦、 足立清掃事務所長・早川 亮、生活環境保全課長・山岸 覚、				
開 催 年 月 日	令和7年9月1日(月)				
開 催 時 間	14時40分から16時40分まで				
開 催 場 所	足立区役所8階庁議室				
出 席 者	田中 充	水川 薫子	岡安 たかし	土屋 のりこ	田中 功一
※:オンライン参加	中村 重男	石田 好広			
欠 席 者	高橋 杏奈				
会 議 次 第	別紙のとおり				
資 料	・足立区環境審議会【第1回意識啓発・行動変容専門部会】資料				
そ の 他					

（吉尾文彦 環境政策課長）

それでは、意識啓発行動変容部会を始めたいと思います。引き続き、環境政策課長の吉尾です。よろしくお願いいたします。

専門部会の開催に先立ち、事務局からお知らせがございます。審議会と同様に、専門部会にいても出席委員名及び発言内容を掲載した議事録を公開することを報告させていただきます。

それでは田中会長、進行よろしくお願いいたします。

（田中充 会長）

それでは皆さん、よろしくお願いいたします。早速、本題に入らせていただきたいと思います。配付資料の確認ですが、事務局にお願いしてよろしいでしょうか。

（吉尾文彦 環境政策課長）

事務局から配付資料の確認をいたします。事前に皆様にお送りしました資料は、裏面に部会委員名簿が記載されている本日の次第、A4 一枚のもので第1回意識啓発・行動変容専門部会のレジュメ、意識啓発・行動変容専門部会の資料、それから別冊資料集でございます。

続きまして、本日の進め方ですが、審議会同様、資料に沿って事務局から概要を説明した後、意見交換をしていただきます。ご意見等がございましたら、挙手をお願いいたします。会長に指名された後、ご発言をお願いします。基本的には、審議会の進行と同じ形式です。会長の進行のもと、事務局からご質問への回答をしたり、他の委員にご意見を求めたりといった形で、会議を進めていただきたいと思います。事務局からは以上です。

（田中充 会長）

はい、よろしいでしょうか。審議会と同様の進め方になります。よろしくお願いいたします。

まず、議事録署名人を指名させていただきます。大変お手数ですが、岡安委員にお願いいたします。専門部会の議事録がまとまりましたら、ご確認をお願いいたします。

次に、次第の4、専門家委員、有識者のご紹介です。子ども向けの環境教育に関する国の動きや取り組みについて話題提供していただきますが、意識啓発の方策や行動変容の誘導策について、今後検討する際の参考にしたいと考えております。

まず事務局から委員のご紹介をお願いします。

（吉尾文彦 環境政策課長）

本部会のテーマである意識啓発・行動変容、特に子どもや若者の意識に届く情報発信や誘導策の検討を進めるにあたり、専門的な視点からご意見を頂くことを目的に、外部の専門家をお招きしております。目白大学人間学部児童教育学科教授、教職課程センター長の石田好広様でございます。

（石田好広 委員）

よろしくお願いいたします。

（吉尾文彦 環境政策課長）

石田様は、持続可能な開発のための教育(ESD)、環境教育、SDGs などをご専門とされ、環境省の各種環境教育事業検討の有識者委員などを歴任されております。足立区とのつながりという点では、前職で区立小学校の校長を務められており、

令和3年度からは足立区環境学習推進アドバイザーに就任し、区の環境学習事業の検討に深く関わっていただきました。また、第三次環境基本計画策定の専門部会においても委員を務めていただいております。区の環境教育に精通されており、足立区の若者や子どもの特性を踏まえたご意見を頂けるものと期待しております。事務局からは以上です。

(田中充 会長)

ありがとうございます。この後、石田先生から20分ほど話題提供を頂きます。その資料は、先ほど事務局から配付がありました。また、画面にはより詳しい資料が映し出されていますので、画面と手元の資料を見ながらお話をお聞きいただければと思います。

それでは石田先生、よろしくお願いいたします。

(石田好広 委員)

よろしくお願いいたします。早速ですが、まず自己紹介をさせていただきます。私は長年、小学校の教員を務めておりました。ひょんなことから環境省の仕事を手伝ったり、東京都環境局で勤務したりといった経験を経て、小学校の校長となりました。校長を退職した現在は、目白大学で教職課程を担当し、小学校教員を目指す学生の指導をしています。環境省での勤務以来、環境教育やESDに取り組んでおります。そのあたりの情報をまとめてお伝えできればと思っております。20分弱ですが、よろしくお願いいたします。

まず、こちらをご存知でしょうか。旭硝子さんが古くからデータを取っている「環境

危機時計」というものです。終末を12時とした場合、今は何時だと思われますか。私自身は11時くらいかなと思いますが、この調査の結果を見ていただくと、このようになっています。1992年は7時49分で、それほど危機意識が高くないように感じられますが、皆様はいかがでしょう。2020年のデータでは9時47分と、「極めて不安」な状況まで来ています。これは世界的なデータですが、日本国内に限ると6時40分という結果が出ています。この資料をお持ちしたのは、Z世代と大人世代、つまり若者と年配者の違いが分かりやすいからです。Z世代では6時20分と考えているのに対し、大人世代は7時ということで、40分の開きがあります。やはり若者の方が危機意識は薄いのではないかと思います。この点は、大学で授業をしていても感じることです。例えば温暖化の問題でも、若者にとってはそれが当たり前の状態で、昔がどうだったかよくわからないため、あまり危機意識を持ってないのかもしれないと捉えています。

こちらはどうでしょう。日本国内の環境問題で危機的に思う項目がいくつか挙げられていますが、どれが1位だと思われますか。この結果を見ると、気候変動が圧倒的に高くなっています。逆に言うと、それ以外の環境問題に対する意識が低いのかもしれません。残念ながら、この旭硝子さんの調査では、海洋ごみの問題は取り上げていないようなので、該当するとしたら「環境汚染」になるのでしょうか。もし海洋ごみの項目があれば、その値はもっと高くなるのではないかと思います。さらに深刻なの

は、「危機的に感じることはない」という人々が 6.3%もいるということです。このあたりも問題だと感じます。

SDGs が始まり、世界的にも大きく広がりを見せています。企業も様々な形で取り組んでいますが、学校教育の中でも SDGs の広がりが見られます。目白大学のキャンパスでは、教室のラッピングという形で、このような大きな表示が出るくらい、SDGs に取り組んでいます。現在は主専攻以外の学びの副専攻として、SDGs セミナーも設定されています。

こちらは SDGs の認知率について電通が調査したものです。「内容まで含めて知っている」が 40.4%、「内容はわからないが、名前は聞いたことがある」を合わせると 90%以上となり、かなりの認知率を示しています。以前の MDGs(ミレニアム開発目標)に関しては認知率が非常に低かったと思いますが、SDGs はかなり認知率が上がっていることが分かります。第1回の調査から始まり、これは 2023 年までのデータですが、このように認知率が上がっています。しかも、「内容まで含めて知っている」という人々が 40.4%と、かなり高い数字を示しているのは心強いと感じています。

特徴的な部分として、10代の男女ともに「内容まで含めて知っている」という割合が非常に高くなっています。これをどう解釈するかですが、私はやはり学校教育の影響ではないかと考えています。SDGs が導入され、学校教育の中でも取り組みやすいということで、SDGs に取り組む学校が増えてきていると実感しています。そ

の影響が出ているのだと思います。

それ以外にも、学習指導要領はご存じでしょうか。学校で学ぶ学習内容や方法などについてまとめた冊子です。その学習指導要領に「前文」ができました。こちら、以前はなかったのですが、現行の学習指導要領で、その理念を広く国民に知らせるためにあえて付けられたものです。この前文を読むと、例えば4番のところに「生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと」とあり、環境教育や ESD に関係する内容が目標として書かれています。また、「持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる」と書かれているのです。これは各教科のねらいの前に出てくる、いわば一丁目一番地のような目標ですから、非常に大事なところですよ。ですから、環境教育や ESD が以前に比べて推進されるようになったと理解しています。

一方で、体験の機会について考えてみたいと思います。行動変容をもたらすためには、やはり体験的な学びが非常に重要だと私は考えています。こちらは国立青少年教育振興機構という、平成の一桁の時代からずっと体験活動に関する調査をしている団体ですが、平成 24 年から令和 4 年にかけてのデータをご覧いただきたいと思います。自然体験がどんどん減ってきていることがよくわかるデータだと思います。残念なことに、「やや少ない」「少ない」を合わせて 40%を超えているという現状があります。一つだけ具体的な例をお持ちしましたが、どうでしょうか。このデータでは、「蝶やトンボ、バッタなどの昆虫を捕まえた

ことがある」、これについて「ほとんどない」と答えた子どもたちが 40%を超えているわけです。これはかなり大きな問題ではないかと捉えています。

同じく青少年教育振興機構が取っているデータの中で、少し毛色の違う内容のものがあります。「社会は自分の力で変えられると思う」という問いに対して、否定的な考えを示している人がこれだけ多くいます。自分で社会を変えることができると思っていない人間が、行動変容を伴う活動をすることができるのかというと、かなり疑問です。ここが今の教育の非常に大きな問題点ではないかと思っています。いろいろな学校を訪問させていただき、研究授業という形で公開された授業を見せてもらったり、いろいろなお話を聞いたりするのですが、ここのデータがなかなか上がっていきません。子どもたちが社会参画する機会がなかなか設けられていないのが現状だと思います。

こちらは、曾我・今井・土屋の研究結果ですが、子どもの頃の体験が少なくなっており、「経験の消失の時代」と呼ばれています。「生き物を捕まえた」経験がある人ほど大人になってから環境保全活動に取り組んでいるということがわかってきています。ですから、子どもの時代の自然体験活動がいかに重要であるかがわかるかと思っています。ちなみに、小学校では1、2年生に生活科という科目があり、自然体験的な活動が十分に行われます。しかし、小学3年生以降は自然体験をする機会が少なく、3年生、4年生の理科の学習や、熱心な学校では遠足や宿泊学習の際に自然体験

活動を設定しているところもあります。

環境教育の実態と子どもたちの現状について、東京都の調査結果をお持ちしました。残念ながら国の調査結果はないので、東京都のデータのみで申し訳ありません。幼稚園・こども園、保育所等では、環境教育や自然体験的な活動の優先度が高いというデータが出ています。「どちらかといえば優先度が高い」を含めると、幼稚園、こども園、保育園の時期は、かなり自然体験的な活動をしていることがわかります。一方で、小学校、中学校になると「優先度は高い」という割合がかなり少なくなってきました。もちろん学校教育ですから、他にやらなければいけないことはたくさんありますが、もっと優先度が高くていいのではないかと感じています。

こちらは環境教育に取り組む上での問題点に関する、小学校と中学校のデータです。一番多いのは、「時間の確保が難しい」ということです。学校教育は本当に忙しい状況で、先生方は時間を生み出すのに苦労されていると思いますが、この部分が一番のハードルになっていることがわかります。それ以外には、「予算が少ない」ということもあります。自由に活動できるような予算をもっと確保すれば、環境教育が推進されるのかもしれませんが、また、「専門的な相談ができる場所がない」というデータも出ていますが、このデータをもとに様々な形で小学校や中学校の現場をサポートできれば、環境教育が充実していくのではないかと考えます。

こちらは、国語の教科書で有名な光村図書が調査したデータです。温暖化に特

化して調査した内容になります。「地球環境が壊れて温暖化が進むことは心配ですか」という問いに対しては、「とても心配だ」「少し心配だ」を合わせて90%の子どもたちが心配だと答えています。ところが、「地球環境を守るために自分にできることはあると思いますか」という問いには、「あると思うが何をしたらよいかわからない」という回答が48.6%、「自分の力ではどうしようもない」との回答を合わせると、約70%の子どもたちが、自分自身で行動していこうという思いに至っていないことがわかります。

気候変動についてのデータですが、こちらは日本財団の調査になります。男女で特に大きな違いはありません。「気候変動による影響への不安」を「非常に感じる」が40.9%、「少し感じる」が45.0%ということで、不安は感じているということです。こちらの「将来の自分の生活への気候変動の影響の有無」という質問では、環境問題についての学習が十分できているかどうかの影響が大きいということがおわかりになると思います。環境教育を行う上で、質的な側面が非常に重要になってくるのがわかるデータではないでしょうか。

こちらはユネスコのデータです。「気候変動を説明できない」「何も知らない」「大まかなことしか知らない」若者が70%もいます。今度は教師の方に目を移すと、95%の教師が気候変動を教えることが重要だとは思っています。しかし、「気候変動を教えられるか、教える用意がある」教師は30%未満で、教えることは重要だと思っているものの、その準備ができていない、

どのように取り組んでいいかわからないというのが現状なのだと思います。

ネガティブな話ばかりしてしまいましたが、社会が変化し、子どもたちの教育も成果が上がってきたのかと思えるニュースがあります。「名古屋若者気候訴訟」というもので、電力会社などを相手に訴訟を起こし、気候変動を何とか止めようという動きを示している事例です。こういう若者がいると心強いですね。

今日はお時間がないので紹介できませんが、機会があれば見ていただきたいのが「グリーンブルーエデュケーションフォーラム」というところで、動画のコンクールをやっています。環境教育やESDに取り組み、実際に行動を起こしている子どもたちの動画が掲載されているのですが、こちらを見ると、「ここまで子どもたちでも取り組めるのか。」と勇気づけられるような事例が多いです。また、こちらは環境省が選んだ「環境教育ESDの実践動画100選」というもので、こちらも様々な事例が紹介されており、参考になると思います。

ここから少し脱線しますが、足立区の環境学習アドバイザーとして、足立区の環境教育のお手伝いをさせていただいているので、その事例について簡単に紹介します。5年生は「鋸南自然教室」として千葉の房総の方へ宿泊学習に行くのですが、その際に「海洋学習体験プログラム」を実施するというので、日本財団さん、アクティンディ株式会社の皆さん、そして足立区が連携して推進しているものです。私も加わらせていただき、様々な形でアドバイスをしてきております。内容的には、子どもた

ちがウェイクボードに乗って海に漕ぎ出すような体験をしたり、「漁港プログラム」として、朝早く漁港に行って水揚げされた魚についていろいろな話を聞き、競りの疑似体験のようなことを行ったりする、大変評判の良いプログラムになっています。「フォトテーリング」というのは、オリエンテーリングのような活動で、自然観察をしてほしいポイントに行って問題を解いて帰ってくるという活動です。あとは、磯観察やプランクトンの採取といった体験をしています。

これは足立区の特徴なのですが、「海に行ったことがない」と答えている子どもたちが、残念ながら1割いるのです。他区で話を聞いたことがあるのですが、港区さんの学校で子どもたちに尋ねると、どの子も「海に行ったことがある」と手を挙げるそうです。足立区で同じ質問をすると、1割の子が手を挙げないという現状があります。だからこそ、この機会を捉えて、海での経験を積ませてあげたいと思っています。事前アンケートでは、「海での遊びをたくさんしたことはありますか」という問いに対し、「全然当てはまらない」「あまり当てはまらない」「どちらとも言えない」を合わせると、半分近くの子どもがそのように答えています。こういった現状を何とかしたいということで、プログラムを組んで実施しています。成果としては、「自分たちにとって海が身近な存在だ」と感じる子どもたちが大きく増えたという点が挙げられています。

それから、こちらは胸を張れる内容だと思うのですが、「足立区環境学習教材」というウェブ学習教材を作っています。ショートコンテンツをたくさん集めたウェブ教

材で、他の自治体からも問い合わせがあるほど、評判の良い内容になっています。こちらもし機会があれば、ご覧いただいてご意見をいただければと思います。

雑駁な説明になってしまいましたが、以上で私からの情報提供を終わりにしたいと思います。ありがとうございます。

(田中充 会長)

ありがとうございます。全国的な若者の世代別の意識や、環境教育に対する関心度、あるいは気候問題に対する関心度、そして最後には足立区での具体的な取り組みの事例もご紹介いただきました。それでは、まずこの報告の内容について、ご質問などありましたらお受けしたいと思います。いかがでしょうか。内容について確認したいことがあれば、お願いいたします。

では、私から確認させてください。最後のほうでご紹介いただいた、区立小学校での海洋学習や体験プログラムの例ですが、これに割いている時間などは、小学校ごとに異なるのでしょうか。あるいは、区の小学校で、比較的標準的に、または一律的に取り組まれているのでしょうか。その点について、疑問に思いましたのでお伺いします。

(石田好広 委員)

5年生の子どもたちが全員、鋸南自然教室に参加するというのが、今までのやり方です。現在、施設改修のため2年ほど自然教室に行けず残念なのですが、それまではどの学校も鋸南自然教室に行くことが決まっており、そこで何を学ぶかについては、各学校の裁量に任されています。このプログラムに関しては、校長会などで案

内をし、申し込みのあった学校の中から、全校を引き受けることはできないため、いくつか選抜された学校に体験してもらうという形で進んでいます。料金は有料ですが破格の値段で、子ども一人当たり2,000円程度支払えば体験できる形になっています。スタッフの数も多いので、実際にはかなりの高額な費用がかかっていると思います。特にウェイクボードの体験では、安全管理上、相当な数の係員がいないと実施できないので、そのあたりは本当にありがたいです。おそらく学校だけでは絶対にできないプログラムだと思います。

(田中充 会長)

わかりました。ありがとうございます。先進的な取り組みだと感じました。

他の委員から何かございますか。はい、水川委員どうぞ。

(水川薫子 委員)

はい、私からお伺いしたいのは、15枚目からの「体験の機会の減少」というところで、自然体験の変化や、昆虫を捕まえたことがあるかどうかの変化が挙げられていたと思うのですが、令和4年のデータはやはりコロナの影響があると思います。その点は今後、また少し戻るとお考えでしょうか。

(石田好広 委員)

原因については触れていない調査なので何とも言えませんが、これよりも前の、平成17年や平成10年だったと思いますが、その時からすでに自然体験が減ってきていることが示されています。ですので、一連の流れから考えると、コロナの影響だけで減ったということではないと、私は考

えています。

(水川薫子 委員)

はい、わかりました。

(石田好広 委員)

昔はいろいろなデータが載っていたのですが、今はあまり公開されておらず、例えば「日の昇るところや夕日が沈むところを見たことがあるか」といった調査もされているのですが、「ほとんどない」というような答えが返ってきており、非常に深刻な問題だと感じています。

(水川薫子 委員)

ありがとうございます。

(田中充 会長)

大変興味深いデータや情報をご提供いただけたかと思います。

(水川薫子 委員)

あともう1点よろしいですか。気候変動による影響への不安といったところで、直接この内容とは関係しませんが、最近「環境疲れ」とか「気候変動疲れ」のような言葉を聞くことがあります。そういう話ばかり聞いて、子どもたちが疲れてしまうという話も聞いたことがあるのですが、そうしたものに対して先生はどのようにお考えでしょうか。

(石田好広 委員)

私は直接「気候変動疲れ」といった話を聞いたことはありませんが、とても残念に思うのは、ESDや環境教育に熱心に取り組んでいる学校さんに、気候変動についても取り組んでほしいと思うのですが、なかなか気候変動に関する授業を展開してくださらないことです。教員として扱うのが難しいという考えがあるのかもしれませんが

し、また、体験的に学ぶことができないからではないでしょうか。海洋ごみの問題であれば、実際に自分たちでゴミを拾いに行って体験できますよね。そういったことがなかなか難しい。もちろん、ゴミを減らすとか、節電するといったことはできるかもしれませんが、気候変動との関わりが、なんとなく実感できないから、気候変動教育が推進されないのかなと思っています。本当に大きな問題なので、もっと何とかしてほしいと感じています。

（水川薫子 委員）

ありがとうございます。

（田中充 会長）

ありがとうございます。はい、岡安委員どうぞ。

（岡安たかし 委員）

体験の機会が減少しているというのは、本当に先生のおっしゃるとおりだと思います。昨今の子どもはゲームに没頭していて、あまり外に出ないという場合もあります。例えば、VR で実際に海や山に行かなくても、カヌーを漕いだり、山で昆虫を捕まえたりするような感覚が得られる技術があります。そういった映像やICTを活用した疑似体験でも、実際の体験と同じような効果が得られると先生はお考えでしょうか。これが1点目です。

また、実際に体験したことと、そうした疑似体験を比較したデータが、世界的に見て何かあるのかどうか、もしあれば教えてください。

（石田好広 委員）

はい、ありがとうございます。私も関心のあるところなのですが、残念ながらそう

いったデータはなかなかありません。個人的に、本物の体験と VR などでの疑似体験の決定的な違いは、情報量ではないかと感じています。VR だと、その内容について、ある程度絞り込んでデータを提供するわけですが、実際の体験は五感をとおして行われ、数値化できないほど膨大な量の情報が入ってくると思います。そこが決定的に違うのではないかと捉えています。

（田中充 会長）

はい、どうぞ事務局、お願いいたします。

（吉尾文彦 環境政策課長）

事務局から少し補足させていただきます。今のお話に直接関連するものではないのですが、環境部では、ゴミを減らすための生ゴミ処理機について、区議会にご承認いただき、補助を拡充して展開しております。その中で、区民の方々やお子さんたちに、廃食用油を回収して SAF（持続可能な航空燃料）というジェット燃料にすることを説明しても、なかなか伝わりにくいのが現状です。そこで、お祭りなどのイベントで VR を体験してもらい、理解を深めてもらおうとしています。その場で親御さんにも一緒に見ていただき、「家で唐揚げをした後の油を、今度持っていこうか。」といった会話につながればと考えています。そうした取り組みを行っており、VR を体験した子どもたちの反応は非常に良い状況です。

（石田好広 委員）

やはり ICT の活用は、これからの教育分野では非常に重要な視点だと思います。しかし、ICT は、それがないと体験できないからこそ導入するのであって、実際に体

験できるのであれば、やはり本物の体験をするのが一番だと考えます。行動変容につなげる学びを考えたとき、先ほどお話しした「本物との出会い」は非常に重要だと考えています。実際に自分が体験すること、そして専門家の方から話を聞いて問題意識を高めること。こういったことを通して、問題を「自分ごと化」できるのではないのでしょうか。自分ごと化することによって、初めて最終的に行動変容につながる学びになっていくのだと思います。現在、学校では探究学習として、自分で調べたい課題を設定し、調べてまとめて発表する授業が行われていますが、どこか「調べさせられている」ような学習になってしまっており、教師主導から抜け出せていないように感じます。なかなか子どもの本当の課題になっていない学習が多いという点が、大きな課題ではないかと考えています。

（田中充 会長）

ICT や VR を使ったバーチャルな体験と、本物や現実に触れる体験とでは差があるのではないか、というお考えですね。はい、ありがとうございます。

委員から他に何かございますか。水川委員どうぞ。

（水川薫子 委員）

すみません、先ほどの私の質問で言葉の誤りがあったので訂正させていただきます。先ほど「環境疲れ」「気候変動疲れ」と言いましたが、「気候不安」や「エコ不安」といった言葉の方が正しく、そういった言葉がありますので訂正させていただきます。特にヨーロッパの方などでは「気候不安症」のようなものがより広がっていると聞いたこ

とがあったということです。言葉の間違ひがありましたので、訂正させていただきます。

（田中充 会長）

最初に委員がご発言された「環境疲れ」という言葉も、実は存在します。よくリサイクルの世界で使われるのですが、あれこれと分別を呼びかけると、細かくなればなるほど、いわゆる「リサイクル疲れ」を起こしてしまうというものです。そうした面倒臭さを感じてしまう区民が一定数いるということは、よく耳にします。

むしろ、委員が今訂正されたのは「気候不安」、つまり気候に対して不安を感じている人がだんだん増えてきている、ということですね。

他の委員で何かありますか。よろしいでしょうか。はい、ありがとうございます。

先生、大変貴重な情報をご提供いただきまして、ありがとうございます。これからの検討の、いわば叩き台や素材になると感じております。

それでは、事務局に今回の資料をご用意いただいております。ご確認いただきたいのですが、論点をリストアップしたレジュメが1枚と、それに関連した綴じ込みの検討資料として、関連情報を取りまとめたものがございます。この内容をご紹介いただき、その後少しフリーディスカッションをお願いしたいと思います。では事務局、説明をお願いいたします。

（吉尾文彦 環境政策課長）

今、会長からご説明いただきました、まずこのA4のレジュメについてです。時間も限られておりますので、あらかじめ事務

局の方で、ゴシックで記載した部分について、今回この部会である程度合意が得られれば、次の11月の部会で具体的な施策内容の検討がしやすくなるのではないかと、あくまで叩き台を用意させていただきました。全ての年代の意識啓発と、子ども・若者の意識啓発の2つに分けさせていただいておりますが、その理由や、このレジュメをどのような経緯で設定したのかを説明させていただきたいと思います。綴じ込みの資料の1ページをご覧ください。

現在の第三次足立区環境基本計画の進捗から見える課題については、5月に行った審議会で確認したところです。こちらの振り返りになります。新規の委員の方々におかれましても、ご確認いただければと思います。項番1の(1)「主な指標と達成率」のところですが、例えば、助成制度による省エネ支援件数や、先ほどの第2回審議会であった太陽光の補助の達成率など、かなり順調にすすんでいる指標もあります。一方で、イの「区民の環境意識関連の主な指標」、例えば石田先生からお話があった「自然環境を大切にすることを心がける区民の割合」などは、達成率があまり伸びていません。さらに若者に注目すると、よりポイントが低い状況です。従いまして、(2)「指標の達成状況から見える課題」として、①施策の効果が区民の意識や行動に十分に結びついていないこと、さらにその傾向が特に若い世代で強く見られることが分かりました。

2ページをご覧ください。この課題にもとづき、事務局案としていくつかの方向性を設定させていただきました。まず課題1、

全ての年代の方々については、①環境への取り組みによりプラスアルファの効果を感じてもらう仕組み、②これまで環境への意識が低かった層を巻き込む仕組み、③「やってみたい」環境活動を実現できる仕組み、ということです。そして課題2、若者については、①で若者に届く情報発信が必要ではないか、②で石田先生からもお話があったように、体験の機会を創出する仕組みが必要ではないか、③で若者なので楽しみながら環境を学ぶことも必要ではないか、さらに④で若者から家庭内への波及効果が、課題1の全世代にもつながっていくのではないかと、といった点を挙げております。特にこの課題2につきましては、6月、7月に政策経営部と連携して開催した「若者会議」で高校生から話を聞く機会がございましたので、その内容の骨子をこちらに挙げさせていただいております。

3ページをご覧ください。こちらも前回の審議会の資料に若干手を加えたものです。先ほどの議論でも「環境疲れ」といったお話がありましたが、これまでは環境への取り組みには、ややもすると「不便」「我慢」といった負担感がともなうことがあったかと思います。これからは、この環境基本計画の上位計画である足立区全体の基本計画に「ウェルビーイングを高める」という考えが示されました。前回の審議会で、文言について少し誤解を招く表現ではないかのご指摘をいただきましたので、「環境活動での+αの効果」として、例えばお得感や健康等、様々な要素をこの「等」という言葉に含ませております。これらを

併せて感じることができる新たなライフスタイルの提案し行動変容を促すため、例えば補助金や環境助成基金で団体・個人の活動を支援したり、様々な環境講座を実施したり、楽しみながら参加できるイベントなども必要ではないかと考えております。こういった形で、ウェルビーイングを高めるところのライフスタイルの提案と考えており、検討点として先ほどまとめた内容を記載しております。①「 $+\alpha$ の効果を感じることができる環境活動」として、具体例を挙げました

4ページをご覧ください。②「これまで環境の意識が低かった層を巻き込む仕組み」ということで、こちらではわかりやすく無関心層と表現しましたが、今まで環境への意識が低かった方々にとっての行動変容はハードルが高い状況かと思います。例えば若者会議で話を聞いてみると、リユース品のやり取りなどはかなりハードルが低く、日常的に取り入れていることが多いということでしたので、これを新たな視点で何かやり取りできるような仕組みが作れないかと考えております。③「やってみたい環境活動を実現できる仕組み」ですが、これは足立区基本計画の中の「やってみたい」を応援するような考え方にもとづいています。例えば、現在環境部で展開している環境基金助成や、学びと現場見学を提供する「環境ゼミナール」など、既存の仕組みをより有効活用できるのではないかと考え、こちらを③として入れております。そして参考として、発信については、政策経営部がシティプロモーション戦略として「磨く、創る、繋ぐ、戦略的報道・広報」を行っていま

す。また、あだち広報、ホームページ、Facebook、X、LINE、最近ではInstagramなど、様々な媒体で発信しているというのが、まず大きな1つ目、課題1に対するものでございます。

(田中充 会長)

ここまでにしておきましょうか。

(吉尾文彦 環境政策課長)

承知いたしました。ではここまでとさせていただきます。

(田中充 会長)

資料の4ページまでご説明をいただきました。世代を横断して行動を促していくための論点として、環境への取り組みによって $+\alpha$ の効果を感じられるような着眼点かどうか、これが1点目。2点目は、これまで環境への意識や取り組みが低かった、あるいは少なかった層をどう巻き込み、広げていくか。3点目は、環境に関心を持つ方がこういうことをやってみたいと考えたときに、それをさらに後押しし、広げていくような取り組みができないか。こういった観点で整理をしたというところでございます。この整理に収まらなくても構いませんが、こんなことをやってみたらどうかという提案や、これはあまり役に立たないのではないかといった疑問など、どんな角度からでも結構ですので、思っていることをフリーディスカッションのような形でご発言いただければと思います。いかがでしょうか。はい、土屋委員お願いいたします。

(土屋のりこ 委員)

前回の審議会でも少し申し上げましたが、一つは、今回は「 $+\alpha$ の効果」として、経済的なメリットとは少し違う言葉で工夫

していただいたかと思います。環境に良い取り組みがウェルビーイングを高めるといふ打ち出しは大事だと思うのですが、お得だからやろうよというような言われ方をすると、区民として少しチープな感じで、小馬鹿にされているように感じなくもありません。日本の過去の環境問題を思い返すと、経済利益を優先するあまり命を脅かす公害問題が多発した歴史があります。そうした歴史の上に今がある中で、お金で釣るような考え方が見え透いてしまうのは、いかがなものかと思います。ただ、区としては、そうしたメリットを投げかけることで、じゃあ気楽にやってみようかなと思う方がいらっしゃるのもわかりますので、その打ち出し方については工夫をお願いしたいというのが1点目です。

2点目は、公害や環境問題の影響で被害に苦しむ人々が過去にも、そして今世界にもいるわけですが、そういった人々への共感を醸成することも大切ではないかという点で、この資料の中では触れられていませんでした。私自身、高校生の時に環境論の授業で、マレーシアのサラワクでの森林破壊によって、そこで暮らしていた人々にどのような影響があったかを知り、初めて環境問題の重要性を感じました。そういった形で気づく方もいるだろうと思います。環境問題に取り組むことは、人間が生きるための基本条件であり、環境は自分自身の存在のために大事にしなければならない、つまり全ての人に当事者性があることですね。そこが理解しづらいということで、環境問題における当事者性の理解を促す啓発の工夫が必要かなと思い

ます。また、若い世代は正義感がありますから、初々しい正義感を持つ若い世代が、過去や現在の環境問題で苦しんでいる人々に対して共感できるような出合いを提供し、その共感から自分自身の行動変容につながるようなことも、区として意識していただきたいです。講座なのか、お祭りでのパネル展示だと、そこまでいかないかもしれませんが、工夫をして、そういった点も大事にしていただけないかということで、この2点、思いました。以上です。

(田中充 会長)

はい、分かりました。非常に奥の深いお話ですね。どうまとめればよいか難しいですが、一つは、あまり経済的メリットという側面を強調しすぎない方が良いのではないかというご指摘があったかと思います。もちろん、経済的利得が行動のきっかけになることは十分あり、これまでもそれを機に拡大してきた取り組みもありますが、そこを前面にして強調しすぎるのは良くない、という観点からのご発言が一つ。

もう一つは、共感を生み出す、あるいは納得感のようなものを打ち出すことで、行動変容につなげる道筋が考えられないか、というお話だったかと思います。どちらも非常に良いご指摘だと感じます。

今の点に関して、あるいは別の観点でも構いませんが、他にいかがでしょうか。はい、田中委員お願いいたします。

(田中功一 委員)

少し理解が追いついていないのですが、例えば、トイレトーパーを再生紙の、少し色の悪いものを買う、といったような話でよろしいですか。

(田中充 会長)

もちろんです。

(田中功一 委員)

ビオレ U の 1.3 倍の詰め替え用は少し面倒だけど、そっちの方が安上がり、というような。経済的利得というのは、そのくらいの数百円の差のこと、という理解でいいのでしょうか。

(田中充 会長)

良いと思います。詰め替えというのは非常に良い例ですね。要するに、新しい容器を買わずに済み、私たちが実際に使う中身だけを手に入れることで、経済的にも資源的にも良い、ということかと思います。関連していかがでしょうか。はい、岡安委員、お願いいたします。

(岡安たかし 委員)

若者の話は次のテーマということですから、まずは大人が中心になりますが、この行動変容を促すというのは非常に難しいと感じます。大人は、特に年齢が上がるほど考え方が凝り固まっていますから。先ほど委員がおっしゃった、量も多くて経済的だから詰め替えをする、というのも、慣れていない人は「そんなこと面倒くさくてできない」となってしまいがちです。しかし、それが大事なのだということをどうやって意識改革していくのか。所管課の方でいろいろと考えていただいた案は、全てとは言わないまでも、かなり出し尽くされているのだろうなという感じはします。「 $+ \alpha$ の効果」に関しては、先ほど土屋委員もおっしゃったように、あまり経済的なものを前面に出しすぎない方が良いとしつつも、私は個人的には、やはりそうしたものがない

と、特に区民は動かないだろうなと思います。様々なものにインセンティブがあれば、足立区では結構大きく動くものです。知らず知らずのうちにポイントがついたり、何かがもらえたりすることで、そうした行動に結びついている部分が多くあるかと思います。それはそれで必要なのかなと思っています。また、先ほどあったリユース品などは、特に若い世代に広がっているのですが、この前テレビで、この夏 1 か月間で東京で人が大きく動いた場所のベスト3に大井競馬場が入っていました。何かというと、東京で一番の規模の青空市をやっているそうで、そこは洋服が中心なのですが、若者が大勢行くそうです。そういったものに若者がすぐ飛びつくのを見ると、こういうことに関心があるのだろうなと思います。そして、4ページの③の環境基金を使った取り組みは、子どもから大人まで、何かプレゼンテーションをしてもらって、良い仕組みだと判断されれば資金を提供するというのは、「あなたの夢、実現しませんか」というテレビ番組がありましたが、それに似ていて、環境分野での「あなたの夢、実現できますよ」というような企画も面白いのではないかと思います。最終的に何を言いたいのか、自分でもまとまらないのですが、一人ひとりの認識を変え、行動変容を促すという非常に難しい課題の中では、まずは試行的にとにかく動いてみることで、そして、やってみて駄目なら次のものを試す、という繰り返しの一つ。もう一つは、全国、あるいは世界に目を向ければ、様々な先進事例があるような気がします。職員の方は忙しくてなかなかそこまで目が向かない

かもしれませんが、ぜひ他区他市、また世界に目を向けて、良い取り組みだなと思うものには、挑戦していただきたいと思います。以上です。

(田中充 会長)

はい、ありがとうございます。様々な論点にわたってご指摘いただいたかと思います。最後にご発言いただいた、先進事例からもっと学んだ方が良いというもの、本当におっしゃるとおりだと思いました。

他にいかがでしょうか。はい、中村委員、お願いいたします。

(中村重男 委員)

私の孫が小学校3年生で、以前もお話ししたかもしれませんが、学童でSDGsの話を聞いて、みんなで勉強会をしたそうです。そして、自分が育った保育園に行って、年長さんに対してレクチャーをするという活動をしていました。これは素晴らしい取り組みだなと思ったのですが、この発想を少し変えて、小学校の高学年の子たちが環境問題について勉強し、低学年の子どもたちに教える、という形はどうでしょうか。つまり、学んだことを教えることによって、より身につくと思うのです。学校教育で環境問題を教えることは非常に重要ですが、生徒は常に受け身になりがちです。その受けた内容を、じゃあ自分がどう行動に移すか、どう伝えるか、ということをきちんと実践することで、身についていくのではないかと思います。

もう一つ、先生がおっしゃっていた、「自分ごと」にするためには、小さな活動が環境に良い影響を与えるのだということを実感できるような、日常的な仕組みを作った

らいいのかなと思います。例えば先日、自治会で実施したのですが、朝のラジオ体操が終わった後、みんなで15分間公園のごみ拾いをしました。小学生も一緒になって、ペットボトルや缶、燃えるごみなどをたくさん拾いました。そうすることで、みんなが公園で遊ぶときに「この公園、少しきれいになったね」という体験ができますよね。そういったことも必要なのかなと思います。小さな活動が環境に良い影響を与えると、いう成功体験を積み重ねていく、あるいは積んでもらう仕組みを作ることが大切なのではないでしょうか。それから、これまでの環境部の取り組みは、例えば「省エネを心がけている区民の割合をアップする」ために、言い方は悪いですが、補助金を立てて取り組むことがメインになっているかと思います。重点プロジェクトの中でもその点を中心になっており、環境問題をどう区民に広げていくかという視点が、事業として入っていません。補助金制度は重要ですが、それに頼った環境政策ではない、という方向転換を少し考えてもらった方がいいかなと思います。

(田中充 会長)

分かりました。小さな体験から成功に結びつけ、行動を拡大していく、そうした方策や戦略が大事だというご指摘がありました。また、補助金制度にあまり頼りすぎない方がよいというご指摘もありましたが、これも今後の区の環境政策のあり方として参考になるかと思います。今までのところで、先生、何か補足やお考えがあればお願いします。

(石田好広 委員)

次の議題に関わってしまうかもしれませんが、やはり子どもの教育が非常に重要だと感じています。教員に成り立ての頃、子どもたちに向けて禁煙教育を行ったことがありました。親御さんからかなり苦情が来たのですが、大人に向けて「禁煙しましょう」と言ってもなかなか変わらない大人が、子どもから「お父さん、タバコやめてよ。」と言われると、やめられるんです。子どもから世の中を変えるということはあると思うので、やはり子どもの教育が重要ではないかと考えています。また、先ほどの「楽しみながら環境を学ぶ」ということと関係するかもしれませんが、大学生の「ゴミ拾い甲子園」というのをご存知でしょうか。荒川などでごみ拾い活動をしているイベントで、大学対校戦でごみを拾うという取り組みです。私も川のごみ拾いをやったことがあります。無限にごみがあって、やっているうちに本当に嫌になり、自分の無力感を感じて続けられなくなってしまいます。しかし、ごみ拾い甲子園では、最終的にごみを点数化してどこが優勝するかを決めるというゲーム感覚で取り組むため、大学生がどんどん集まり、参加者数が増えているという現状があります。そういった、楽しみながら活動できる仕組みづくりをすることが、非常に重要なのではないかと感じています。

（田中充 会長）

わかりました。ごみ拾い甲子園ですね。はい、土屋委員どうぞ。

（土屋のりこ 委員）

いろいろお聞きしていて思い出したのですが、環境フェアをどうするかという議論

がこれまでの委員会でもありました。足立区では以前は開催されていましたが、今はなくなってしまい、その復活を望む声もあると聞いています。先ほど岡安委員も言われたように、青空市のリユースやリサイクルでは、多くの人が集まり、若い人たちも良い洋服などを求めて賑わうような形の、環境フェアという名前にはならないかもしれませんが、せっかくやっていた環境部のイベントとして、啓発も兼ねて、生真面目に CO₂のパネル展示をするコーナーも一角にあっていいとは思いますが、それだけでなく、大井競馬場の青空市のような雰囲気、このフェスタに来れば、環境配慮型の最先端の暮らしがわかる、というようなものにしてはどうでしょうか。エコ食器があったり、無駄な紙のチラシは配らなかったり、そういった工夫を凝らした、最先端の環境配慮型の暮らしが見つかる区の環境フェアのようなものを企画してみるのもいいのではないかと思います。

（田中充 会長）

いろいろと話が出て、楽しくなりますね。はい、岡安委員どうぞ。

（岡安たかし 委員）

足立区には外国人のコミュニティが少しありますよね。少しというか、今4万人の外国人がいて、毎月 500 人ぐらいのペースで増え続けています。もちろん入れ替わりがあるので増減はありますが、右肩上がりです。これからのことを考えると、外国人の方々にも、コミュニティの中にいるリーダー的な存在の方に、環境というものを意識してもらい、皆さんへの啓発をお願いすることが大事だと思います。特にごみ問題

は、地域で非常に大きな摩擦を生んでいきますので、出し方を含め、無駄に多く出さないという点も啓発していただくことが重要です。これが1点。

もう一つは、先ほどから出ているごみ拾いのイベントです。私も実は言おうと思っていたのですが、やはり、歩きながらごみを拾う大会のようなものを開いて、参加者に図書券を配るなど、楽しみながら、かつ少しインセンティブもあるようなイベントを企画してほしいと思います。この点もよろしくをお願いします。以上です。

(田中充 会長)

外国人の方をどう巻き込むかというのは、非常に難しい課題です。今の社会の中でその割合は年々増えていますので、そうした方々をうまく巻き込んでいく方策が必要だと思います。ありがとうございます。

私なりの所感といいますか、日頃から感じていることを少し述べさせていただきます。人の行動を変えることは、最も難しい課題の一つです。企業の販売戦略もまさにそうで、いかに人々にある商品を買ってもらうかという点に力を注いでいます。それと同様に、区民の皆さんが無理なく望ましい行動をとれるように導く仕組みを作らなければなりません。これは非常に難しく、まさに行動変容を促すことは大きな挑戦であるということです。しかし、これは環境問題の根幹に関わる重要なところですよ。そうした方策意識が変わることが、例えば温暖化問題、ごみ問題、自然保全の問題など、様々な分野に共通していることになります。ですから、意識変容、行動変容は、

環境問題解決のいわば基盤である、これは大事な論点だと思います。

二つ目は、そうした行動を変えるきっかけを作らなければいけない、という点です。岡安委員がおっしゃったように、私も経済的インセンティブは、行動の一つの有力なきっかけになり得ると考えています。社会には多様な価値観を持つ人々がおり、倫理観や正義感だけではなかなか浸透しないところもありますので、理念と経済という両面からのアプローチが必要だと思います。ただ、経済的利得だけを強調しすぎるべきではなく、ある種のばらまきのようになっても意味がありません。そうしたものを呼び水として、関心の薄い層に行動に移ってもらうきっかけとし、その中で効果を実感してもらう。そうすることで、次には経済的インセンティブがなくても、自発的に行動できるようになる、そういった仕組みや構造ができるとよいと思います。ですので、一つのきっかけとして経済的なインセンティブは有力な手段になり得ますが、それだけに頼るのはよくないというのは委員ご指摘のとおりかと思います。

それから、ごみ拾い甲子園や青空市のような参加型の活動についてですが、例えば青空市では、自分が大事にしてきたものが他の人に使われることで、なんとなく気持ちがすっきりするといいますか、ある種の爽快感や納得感が得られる。そういった心情は私たちの中にあるのだと思います。まだ使えるけれど自分では使いきれないものが、他の人の役に立つということが、ある種の爽快感、納得感につながる。そういう共通の心情を発揮できる場を作るこ

とが大切です。ごみ拾いも同様で、ごみを拾うことで街がきれいになり、気持ちよく感じる。そういった感覚は皆さんお持ちだと思います。ただ、面倒だったり、億劫だったりして、道に落ちていても拾わずに通り過ぎてしまう。そこを少し後押しすることで、自ら積極的に拾うようになったり、目につけば拾うようになったりする。そうして街がきれいになることの爽快感を得られる仕組みを作ってあげるというのも、確かに良い方法だなと思いました。

長々と話しましたが、今までの議論を聞いての私なりの所感です。よろしいでしょうか。それでは、後段の議論もありますので、資料をご説明いただき、また全体について話し合いたいと思います。では、事務局をお願いします。

（吉尾文彦 環境政策課長）

この後の時間は、課題2に対する施策の方向性についてです。まず、資料の2ページ後段、そして5ページからの子ども・若者の意見を反映という部分をご覧ください。こちらですが、上位計画である足立区基本計画の理念に「子ども・若者と進めるまちづくり」というものがあります。そして、先ほど申し上げましたように、意識調査では若者のポイントが低いという状況がございます。そこで、政策経営部と連携し、若者会議として高校生などに意見を聞く企画がございました。

6ページをご覧ください。ここでは、上が高校へのアウトリーチ、下が公募型の2つに分けてお話をします。まず、高校アウトリーチでは様々な意見を頂きましたが、ゴシック体の部分をご覧ください。SNS や動画

の活用についてです。私も高校に行きましたが、会議の場では生徒の皆さんはスマートフォンを置いて我々と意見交換をしていました。学校からの情報も全てアプリで届くそうで、SNS や動画を活用するのが当たり前になっているという話でした。また、詳細な情報よりも印象に残ることが重要で、短い動画が非常に流行っているとのことでした。次に、学校、家庭、生活習慣など、身近な環境からの気づきが多いということです。例えば、学校の英語の授業でマイクロプラスチックについて聞いて、それが頭に残っているという話もあれば、アルバイト先での話など、多岐にわたる経験から気づきを得ているようでした。そして、環境に関する様々な取り組み、例えば足立の区民まつりに来てくれた方もいましたが、そうした体験を通して印象に残ったという話がありました。さらに、若者同士で発信するということ。何かコンテンツを作ってもらえれば、自分たちで共有して発信するよ、という声がありました。その方が共感しやすいだろう、ということです。「見える化」、「体験」、「わかりやすさ」、「映像・視覚」、「楽しみながら実践」といったキーワードが多く挙げられました。

続いて、その下の公募型の意見です。ゴシック体の部分ですが、身近な問題として、自分ごととして感じてもらうことが重要だという意見がありました。同世代のことを考えると、環境問題は自分ごとになっていないので、若い人たちには自分ごととして感じてもらうことが必要だろうということです。また、「みんなで取り組む」こと。例えば、ごみ分別のゲームのようなイベントが

あれば、みんなで取り組みやすいのではないかと、といった意見がありました。高校生と同じように「楽しみながら」という話もありましたし、「日常生活の中でルール化する」ことも挙げられました。例えば、学校の中でルール化されていることは、家でも自然に取り組むことができる、というような話がありました。これらの意見をまとめさせていただいたのが、戻りますが2ページとなっており、先ほど少し説明させていただいた内容です。①若者に届く情報発信、②体験の機会を創造、③楽しみながら環境を学ぶ、そして④家庭で共有・習慣化、という形で整理させていただきました。私からは以上です。

(田中充 会長)

ご説明いただいた資料の6ページ、7ページあたりは、アンケートの結果ということでしょうか。子ども向けにアンケートをした結果ですかね。

(吉尾文彦 環境政策課長)

はい、6ページが実際に出向いて意見を聞いたもので、7ページは会長のおっしゃるようにアンケートの結果でございます。先ほどまとめさせていただいた、小・中学生、高校生・若者、未就学児の保護者へのアンケート結果を別添で付けておりますが、高校生や公募型で頂いた意見と、内容的にかなり似通っている部分が多いと感じております。以上でございます。

(田中充 会長)

はい。では、子ども世代に焦点を絞って、様々なアプローチがあるのではないかとということで整理をいただきましたが、この内容について、ご感想やお考えがありました

ら、またご発言を頂きたいと思います。いかがでしょうか。はい、岡安委員どうぞ。

(岡安たかし 委員)

先ほど石田先生がおっしゃったとおり、子どもから意識改革をしてもらうことは、親や他の世代にも非常に大きな影響を与えると私も思っています。ただ、実際に学校等でどれだけ環境教育の時間が取れるのか、よくわかりません。例えば、薬物教育や法教育など、様々な専門家団体からも「学校でこういうことをやってほしい」という要望がある中で、総合的な学習の時間など、いろいろなことができる時間は限られています。どこまで環境に特化した教育ができるのか。理科などの授業では少ししか扱われないような気がしますし、体験活動もとなると、本当に教育分野との連携が重要だなというのが一つです。しかし、重要なことなのでぜひやってもらいたいと思います。

もう一つは、先ほど出ていた動画です。私の下の子は高校生ですが、見ているのはほとんど動画で、しかも短いものです。1分ではもう長く、30秒の動画がたくさん出てきます。足立区でも、環境に関する30秒動画が次から次へと流れてくるような仕組みが、若い世代には有効なのではないかと思います。

それと、体験についてですが、この若者向けの最初のところに「体験の機会を創造する仕組み」とあります。例えば、打ち水体験は千住でやっていますが、あのようなのを全区的に小中学生にも体験してもらい、そこで、なぜこんなことをやっているのかというレクチャーも入れながら環境を学

んでもらい、少しお菓子もあげるといったようなことを、全区的に展開するのが大事なのかなと思いました。雑談的な話ですみません。

（田中充 会長）

ありがとうございます。他にどうでしょうか。はい、土屋委員お願いいたします。

（土屋のりこ 委員）

自然そのものに価値を見出し、それを守るという体験を、区がたくさん用意することが大事ではないかと思います。先生のお話にもありましたが、雄大でダイナミックな自然の中に身を置くような体験はなかなかできません。私も若い頃、山登りが好きで行っていましたが、お金もかかりますし、家庭の経済状況によって大きく左右されてしまうものです。例えば、燕岳の合戦小屋でスイカを食べるといった体験は、子どもにとってすごく楽しいのではないのでしょうか。そこから、日本の林業はどうなっているのか、なぜ放置されているのか、手入れをしないとどうなるのかといったことに考えが及んでいくのだと思います。海の体験のお話もありましたが、山登りやグランピングでも何でもいいので、家庭環境に左右されずに、足立区の子どもたちが体験できるチャンスを、区が積極的にたくさん用意することが重要であると思います。それが一つです。

また、個人的にウミガメの保全に関心があり、以前、海岸のごみ拾いに行ったことがあるのですが、海岸のごみは本当に掘れば掘るほど出てきて終わりがありません。ただ、いろいろなごみが出てきて、ボールなどもあり、楽しい面もあります。小笠原

でウミガメの産卵保全に取り組んでいる団体が、海洋プラスチックごみでアートを作るワークショップや、アートと海洋ごみ問題を絡めた講演などを行っています。そういった団体と連携してワークショップを開催するのもよいのではないかと思います。

もう一つ、以前も申し上げたのですが、他の自治体の海岸で拾ってきたごみを足立区に持ち帰ってきてしまった場合に、それは処理できないので、その場に置いてきてください、あるいは、拾った自治体で処分してもらってください、と言われ、困ったことがあります。しかし、もう持って帰ってきてしまっているのどうしたらいいのかと。このように、区民の方や子どもたちが何かにチャレンジしようとしたときには、様々な問題も出てくると思いますので、そういったことを積極的に、アクティブに解決していく姿勢で臨んでいただけたらと思います。以上です。

（田中充 会長）

はい、わかりました。体験できる機会を区が積極的に設けるとするのは、意識啓発や環境教育の施策として、非常に有力なメニューですよね。他にいかがでしょうか。はい、中村委員お願いします。

（中村重男 委員）

6ページに事務局がまとめてくださった内容を見て、今思い出したのですが、「あだち脳活ラボ」というものがあります。私はLINEに登録しているのですが、65歳以上におすすめということで、これを入れています。これはすごく面白くて、今、登録者は6,000人を超えたと言っていました。この「脳活ラボ」と同じようなものを、何か環

境をテーマにして作れないのかな、と。「あだち環境ラボ」でも何でもいいのですが。このアプリでは、動画配信やクイズ、脳トレのクイズなどを色々やっています。もしこういうものが作れるのであれば、コストはかなりかかると思いますが、環境に関する動画配信もできますし、クイズもできる。環境関連イベントの案内もできます。あるいは、学校や行政、地域で取り組んでいる環境問題の事例なども入れ込めますし、例えば、猛暑や熱中症対策の動画、注意事項など、ありとあらゆるものが入ると思います。ごみの分別やプラごみの分別の話もしかり、省エネでコストを削減しましょう、というような内容も全部入ってきます。こういったものができると、すごく使い勝手がいいのかなと思います。LINE で提供されているので、友達登録がすぐできます。煩雑ではなく、65 歳以上の方を対象にしているので、おそらくそういったコンセプトでやっているのだと思いますが、こんなものがあつたらすごくいいなと、この6ページのまとめを見た時に思いましたので、ご紹介させていただきました。

(田中充 会長)

今のご提案のようなものは、区の環境部の方ではお作りになられていないのでしょうか。

(吉尾文彦 環境政策課長)

ございません。

(岡安たかし 委員)

「脳活ラボ」自体が画期的なんです。アプリですね。アプリで操作すると、環境が学べたり、動画が見られたり、クイズに答えたり、ポイントが貯まったり。

(中村重男 委員)

そうです。ポイントがつくんです。脳活で動画を見たりすると。それを楽しみにやっている人がいるみたいです。

(岡安たかし 委員)

面白い発想ですね。

(中村重男 委員)

ですから、私はこれ、区民評価委員会で説明を受けたときに、タイトルを「脳活」ではなく「健康」にして、健康関連の情報をすべてここに集約すれば、全て網羅できると思いました。例えば、「パークで筋トレ」などに参加する人も、そこで参加人数を把握できますし、様々なデータも取れますよね。足立区では体組成計のデータなども取っているんで、そういったデータを自分で入力していけば、すべて自分で管理できるし、区でも状況が把握できる。そういったことなので、このスキームを全て活用できるかは分かりませんが、同じようなスキームであれば、それほどコストはかからないのではないかと、素人考えでは思うのですが。

(吉尾文彦 環境政策課長)

全く同じようなことは環境部としては、難しいかもしれません。ただ、何かをしたらポイントが付与されるという点で重複するものがあるそうで、東京都の「東京ポイント」ですね。そういったものの今後を見ながら、全庁的にそのようなものを検討してはどうか、という話は少し聞いたことがあります。それがどのように活用できるかについては、検討している段階だと聞いております。

(田中充 会長)

今、中村委員からご紹介いただいたのは、足立区が作られている区のアプリということですか。

（中村重男 委員）

そうです。今年、令和7年からできたものです。

（田中充 会長）

直感的に、そのアプリの中に、環境分野や暮らしの分野といったカテゴリを作っていたらどうか、と思ったのですが。

（中村重男 委員）

そうなんです。この中に環境部分を入れられればいいのですが、タイトルが「脳活」なので、65歳以上が対象なんです。

（田中充 会長）

それはそれで完結しているのですね。確かに、高齢者向けの健康づくり、精神的・心理的な健康づくりという「脳活」に加えて、身体的な健康づくりも一緒にしていくというのはありますし、さらにいえば、社会全体の健康づくりとして、環境や福祉といった分野に広げていくといいなという印象を持ちましたが、少し大変かもしれませんね。

おそらく、シティプロモーション課のようところが所管しているのでしょうか。

（吉尾文彦 環境政策課長）

おそらくこれは、福祉部門が中心となり、会長がおっしゃるような発信系の部署とコラボレーションしているのだと思います。また、今お話に出ているような、他の分野との連携について、政策経営部も視野に入れているかと思います。様々な所管が、ポイント制度をどのように活用できるかとい

うアイデアは持っているようです。

（田中充 会長）

他に、今の点でも結構ですし、他のご意見はいかがでしょうか。はい、どうぞ。

（水川薫子 委員）

高校生へのアウトリーチ、公募型、どちらの意見でも、動画での情報発信や、生徒から生徒への情報伝達の有効性といった、どう伝えるかという点が挙げられていたと思います。生徒から生徒への情報伝達が有効というのは確かにわかりますが、最初の起点となる生徒をどうやって確保するのか、という点が気になりました。それが続く仕組みを作るといいのかなと思って聞いていました。例えば、区の方で関心がある生徒を任命するなど、アルバイトのような形をとることはできるのでしょうか。

また、大学受験を考えている生徒であれば、そうした活動が総合型選抜入試、いわゆる AO 入試などでの評価項目になる可能性もあります。ですので、起点となる生徒にも何かインセンティブがあるような仕組みがあれば、その子が卒業して大学生になっても、また別の高校生が続いて参加してくれる、というような仕組みができるといいのかなと思って聞いておりました。はい、以上です。

（田中充 会長）

わかりました。ある種の役割や称号のようなものを付与して活用していただく。そうした人が、その中でのリーダーやサブリーダーのような形で活動する。それも有力なアイデアですね。

これまでのところで、先生何かご発言ありますか。

（石田好広 委員）

お伺いしたいのですが、大学生の活用というのは考えていらっしゃるのかな、と思ひまして。足立区には、全部で6大学ですか。かなり多いですね。そういった大学に協力いただいて、足立区の良さを思い切り発信していくとか、新しい何か商品を開発するといった取り組みをするのも、一つ大事なことになるのかなと。ネガティブな環境問題を解決するという視点ではなく、足立区の良いところをもっと取り上げて、みんなで郷土愛を育てながら足立区を発信していく、といった取り組みを考えてみてはどうでしょうか。

それから、先ほど総合的な学習の話がありましたよね。総合的な学習の時間というのは、学校の裁量、極端に言えば校長の専決事項になると思います。ですから、なかなか環境についてやってくれと言っても、全ての学校がやってくれるわけではありません。しかし、生活科を含めると6年間あるわけですから、そのうちの1学年でいいわけです。しかも、1学年まるごと使うわけではなく、20時間なり30時間なり時間を取って活動してくれれば、十分な学習ができると思います。教育委員会にも現場にも嫌がられるでしょうが、少しそれとなくプッシュしてやってもらうような声かけはしていく必要があるのかな、と思ひています。

（田中充 会長）

総合的な学習の時間というのは、様々な要請が多くて、大変窮屈になっていると伺うこともあります。いかがですか。

（石田好広 委員）

すごく窮屈ですよ。何か問題が起これば、すぐに、学校で教育してほしいという話になりますから、急遽時間をとって授業をしなければならない、といった事情が学校の現場にはあります。大変だとは思ひますが、環境問題を学ぶことの重要性を理解していただくことが、まず大事なのかなと思ひています。ですが自分も校長だったので、言われると困るなという気持ちも分かります。

（吉尾文彦 環境政策課長）

現状だけお話しさせていただいてもよろしいでしょうか。学校での環境学習、総合的な学習の時間を活用した取り組みについてですが、足立区としては、様々な環境学習の出前講座を各学校で実施しております。環境学習の出前講座は年間80回、全ての学校ではありませんが、実施しています。また、ごみ減量をテーマにしたピンポイントの環境学習を行っている学校もございますし、清掃事務所も環境学習という形で関わっています。これらを合わせると、100回まではいかないかもしれませんが、かなりの回数を学校内での学習として、教育委員会と連携しながら進めている状況です。また、そういったまとまった時間が取れない学校も多いのが実情です。先の審議会で西の原委員からお話があったように、低学年には環境のワークブックを、高学年には先ほどお話にあったタブレットを使った学習を総合的に取り組んでいます。これも環境部から教育委員会にお願いして実施しているものです。教育指導主事とも話し合い、今年度からブラッシュアップしていこうという形で取り組んでいるの

が現状です。

今、委員の皆様の目の前のモニターに、少し概要を表示させていただいております。

(田中充 会長)

このような体験ツアーも企画されていますね。

(吉尾文彦 環境政策課長)

自然の中に身を置くというお話で言いますと、冒頭に石田先生からご紹介があった小学5年生の取り組みに加え、中学1年生が友好都市である新潟県の魚沼市に行くときには、自然の中での環境学習の時間も設けている、という状況です。

(田中充 会長)

論点として抜けていたのが大学生ですね。ただ、若者会議は大学生が中心でやられていたのでしょうか。

(吉尾文彦 環境政策課長)

大学生も参加しています。現状を申し上げますと、大学生には環境基金助成を活用して、環境に関する取り組みをいただいています。例えば、区内の大学がごみ拾いイベントを実施したり、クリスマスのイベントで廃棄物を利用したイルミネーションを制作したりといった形で取り組んでいます。ワークショップを開催していただくこともあります。そうした活動については、大学連携の部署に環境部の職員がお願いして働きかけているという状況です。

(田中充 会長)

ありがとうございます。前段の大きな1の、全世代に共通する、意識の低い層への取り組みと、特に若い世代を中心にした取り組みを二段階に分けていますが、これには意味があると考えています。若い世代

は、これから社会に出ていく層であり、また、学校という教育の場を共有しているという特性があります。そのため、若い世代向けのプログラムや施策体系、メニューの設計や提案が必要ではないか、という問題意識です。学校の間を活用することも、学校以外の場を活用することもあるかと思っています。また、若い世代特有の問題意識や、SNSや動画を中心に情報を入手するといった特徴を捉えて、情報発信や場の提供を考えていくことが大事かと思っています。

委員の方から何か追加でございますでしょうか。はい、岡安委員どうぞ、お願いいたします。

(岡安たかし 委員)

先ほど、環境フェスティバルの話がありましたが、コロナ前の2019年以前には、環境フェスティバルや、小中学校・教育委員会に協力を仰いで、特に小学生向けに様々なメニューを提供していたことが何年かあったと記憶しています。例えば、夏休みの絵日記のように、毎日気温を測ることを奨励し、やり遂げた子に何かをプレゼントする、といった企画がいくつかあったかと思っています。子どもたちを巻き込み、親子で話し合うきっかけにもなるし、石田先生がおっしゃったように子どもたちから意識を変えて大人にまで影響を及ぼす、良い取り組みだと思っていました。しかし、環境フェスティバルがなくなり、そうした企画もなくなってしまい、途中で途切れた中途半端な施策になっているな、と会派内で話した記憶があります。また、これは子ども向けではありませんが、環境フェスティバルで苗木を配り、育てて数年後に持ち寄りまし

よう、というような企画もあったと思いますが、あれも結局どうなったのかさっぱり分かりません。真面目に育てている区民もいるのです。八割方は捨てたり枯らしたりしているかもしれませんが、「これって、確かそういう話でしたよね」と去年か一昨年に言われて、そういえばそうだったなと思い出しました。施策は中途半端に終わってはいけない。5年後を目指して何かを始めると決めたなら、きちんとやりきることが大事だと思います。過去にそういった企画があったと記憶していますが、うろ覚えなので違っていたら申し訳ありません。そうした取り組みはどうなってしまったのでしょうか。途中で終わってしまったのでしょうか。

（早川亮 足立清掃事務所長）

かなり前の地球環境フェアで、品種が間違っていたら申し訳ありませんが、ブルーベリーの苗木をお配りし、育ててもらってどこかに植樹しようという計画があったのですが、継続性がなく、後日、広報等でお配りした苗木を育てている方に呼びかけていたことがございました。今、委員がおっしゃった2019年の地球環境フェアより、かなり前のことだったと記憶しております。

（吉尾文彦 環境政策課長）

加えて補足ですが、環境部としては悩ましいところなのですが、「環境」と銘打つと、環境に関心がある人は来やすい一方で、それ以外の方には広がりにくい、という世論調査の結果があります。そのため、本年度は区民まつりの中に、環境フェスティバルとして、ある程度の規模の区域を設けて実施しようと考えております。その中

で、完全にピンポイントではありませんが、古着のリユースをイメージしたブースなども展開しようと考えております。

（田中充 会長）

今、委員がおっしゃったのは、環境教育のプログラムはある程度、長期的な視野を持って実施した方がよいのではないかと、いう趣旨だったかと思います。確かに、2、3年で目先を変えていくこともありますが、ある程度継続することで定着し、広がりも見え、また効果も長期的に図れるようになります。そうした観点も非常に大事だと、今のご指摘を伺って感じました。ありがとうございます。他にいかがでしょうか。はい、田中委員どうぞ。

（田中功一 委員）

せっかく荒川の河川敷があるので、ウナギの放流などをやってはどうでしょうか。それも継続的に実施して、もともといない生物を放流するのは問題ですが、もし生息しているのであれば、そういった体験型の企画も面白いのではないかと、ふと思いました。

（田中充 会長）

確かに、魚種の問題はありますが、放流がひとつの体験になることはありますね。はい、では土屋委員どうぞ。

（土屋のりこ 委員）

先ほど、「環境」と銘打つと人が来ないというお話がありましたが、これまではそうだったのかもしれませんが、しかし、せっかく環境審議会で、その困難な問題にチャレンジしていこうというわけですから、区が及び腰になっている点が、環境問題への意識が高い人の割合が減っているという

データに現れているのではないかという気もします。「環境フェア」という言葉ではなく、「エコロジー」など別の言い方や、もっと魅力的なタイトル、内容にすることもできるはずです。方法論はあると思うので、そうした形で今一度チャレンジするということも、一つの選択肢として考えていただきたい、という意見です。

（田中充 会長）

わかりました。はい、石田先生どうぞ。

（石田好広 委員）

環境フェアがないというのは少し残念に思いました。私が古千谷小学校の教員をしていたときに、毛長川の学習をしたのですが、子どもたちがかなり頑張って活動し、その時おそらく、小学校として初めて環境フェアで発表してほしいという依頼を受けた学校だったと思います。その後、様々な学校が発表するようになりました。子どもたちの発表の場にもなりますし、子どもたちと大人をつなぐ場にもなると思うので、やはりあのフェアはすごく価値があったなと感じています。環境に絞ると人が来ないということであれば、「SDGs フェア」ではだめでしょうか。環境部局だけでは難しいかもしれませんが、間口が広がりますし、企業も参加しやすくなると思います。ですので、「SDGs フェア」と銘打って活動することを検討してみたいかがでしょうか。よろしくをお願いします。

（田中充 会長）

具体的なご提案ですね。非常に建設的なご意見だと思い、伺っておりました。ちょうど2時間くらい経ちました。はい、中村委員どうぞ。

（中村重男 委員）

今ちょうど画面に出ている足立環境ゼミナールで、「あだち環境マイスター」の方々がいるかと思います。この方々は「地域の環境活動のリーダーとして活躍が期待される」とあります。今、何名いらっしゃるかわかりませんが、逆に言うと、その方々の活動の場はどこなのでしょう。せっかく資格を認定されていても、活動の場がなければ、いろいろ学習された方々が埋もれてしまっている状態ですよ。そうした方々をもう一度掘り起こして、足立区のために何か活動していただくことはできないのでしょうか。

（田中充 会長）

このマイスターの方は、現在何名くらいいらっしゃるのですか。

（吉尾文彦 環境政策課長）

環境マイスターの方々は140名を超えており、現状、委員ご指摘のような状態が、特にコロナ禍を挟んでありました。昨年末から、マイスター全員に個別に連絡を取っており、ヒアリングをすると、例えば区民まつりなどで何か出展する場が欲しい、といったご意見があります。そこで、今年度の区民まつりの中に設ける環境フェスティバルゾーンの一角に、環境マイスターのブースを作る準備を進めているところです。また、コロナ禍でも、密を避けながら開催した、全小学校対象の「環境かるた大会」で審判の補助をしていただくなど、活動していただいています。そうした話し合いの場に集まっていただく中でヒアリングをすると、非常に活発に意見を出される方がいらっしゃいますし、マイスターになられてから、

環境基金助成を活用してご自身で活動されている方もいます。そうした方々からお話を聞く場も今年度設けておりますので、こういった形は来年度以降も続けていけるかなと考えております。

（田中充 会長）

わかりました。マイスターの方からの意見聴取もありますし、提案を受ける機会があってもよいかもしれませんね。いくつか連携して活動の場を作られているようですが、より積極的にそうしたマイスターの皆さんのご意見を聞いて、施策を設計していただきたいです。ありがとうございました。

今日はフリーディスカッションのような形で、皆さんが日頃お考えになっている、区民の意識啓発や行動変容に向けたご提案やアイデアを頂いた、という位置付けだと思います。今回頂いたご意見を踏まえ、次回、整理をしてさらにブラッシュアップしていく、という流れになるかと思います。最終的には計画の内容に結びつけていくこととなりますので、今後は体系的な整理や割り付けといった作業も出てくるかと思います。ひとまずは、今日は様々なご意見やアイデアを頂いたということです。

時間も迫っておりますので、このあたりまでかと思いますが、何か委員から追加でご発言がありましたら、どうぞお願いいたします。いかがでしょうか。よろしいでしょうか。もし、追加でお気づきの点がありましたら、事務局にご連絡いただいても結構です。

それでは、まとまらないながらも、ひとまず自分の意見を述べ、それを事務局に受

け止めていただく、ということで、本日の第1回専門部会を位置付けたいと思います。

それでは最後に、その他ということになりますが、何か事務局からご連絡はありますでしょうか。

（吉尾文彦 環境政策課長）

今回の意識啓発行動変容専門部会は、11月28日の金曜日、午後1時半からの開催を予定しております。今回皆様から頂きましたご意見をまとめて次回の資料とさせていただきますので、施策の方向性や、より具体的な取り組みへと、検討を深めていただければと思います。会場は本日と同じくこの8階を予定しており、後日改めてご案内いたします。事務局からは以上です。

（田中充 会長）

はい、よろしいでしょうか。それでは少し長時間になりましたが、第1回意識啓発・行動変容専門部会は、これにて閉会とさせていただきます。皆様、どうもありがとうございました。

(会議録署名)

令和7年度環境審議会専門部会 会議録記録署名員
(令和7年9月1日 開催)

会 長	田 中 亮
署 名 委 員	岡安隆志
署 名 委 員	